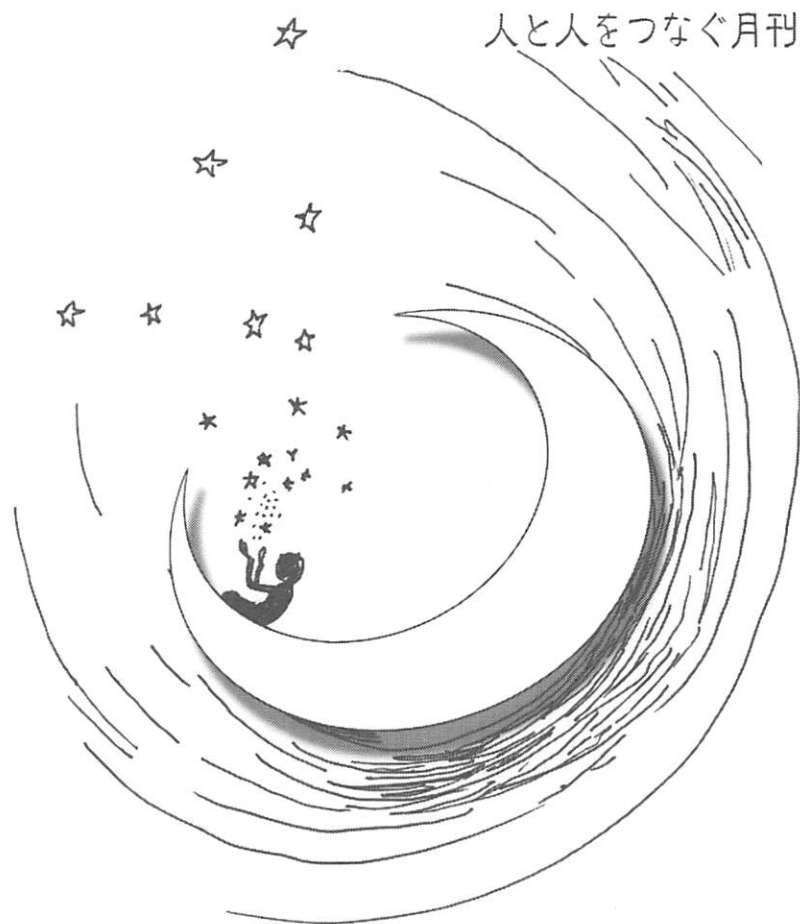


平成18年  
9月号

250円

# やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



ハヤー(謙虚さ)

リュックの先生 東へ西へ...7

素晴らしい才能を持つ子供たち

不安と趣向

ラマダーンについて

「裕福な者は貧しい者の辛い状況やひもじさなどを、この断食において空腹を感じることで、確かに感じる」ことができる。もし断食といったものがなければ、自己に執着する金持ちばかりになり、ひもじさや貧しさがどれほど辛いものか、彼らがいかに憐れみを必要としているか、ということ把握することはできないだろう。」p.28



早いものであと一ヶ月もしないうちにラマダーン月がやってきます。この月にはさまざまな崇拝行為や善行が勧められており、断食だけが目的ではないのですが、外から見たラマダーンは、ラマダーンと言えば断食による苦行という捉え方も多いのではないかと思います。

ついでにイスラームといえば、断食以外にも食べることを禁止されているものも多くて面倒くさい教えという見方も多いでしょう。アレルギーなど特定の食物に体が反応する病気だったら食事制限があることを理解できても、神が禁じているからという理由では理解できないという、どちらかという否定的な声も聞きます。

人間はなんといっても食べることで生命を維持しています。年齢、国籍、肩書き、学歴は異なっても、いくらえらそうなことを言っても結局食べなければ肉体的にも精神的にも生きてはいけない存在です。糧が人間存在の根本であるといっても過言ではないでし。そうであれば、食がいかに大切なものであるか常に考える必要があるのではないのでしょうか。食べる物の取捨選択に始まって、食事の準備、形態や時間など、食に関わるあらゆる面が人間の生き方にも色濃く反映されてくるのだと思うのです。

先日、久しぶりにデパートの食品売り場に行く機会がありました。いつ行ってもその人ごみと熱気には圧倒されますが特に惣菜コーナーの賑わいは格別です。何十軒もの店がカウンターを並べ、美味しさや高級感、おしゃれさをアピールしている様子を目にし、様々なにおいが混じりあう中を歩きながら、ある意味人間の欲望の縮図を見ているような気分になりました。

美味しいものを食べたい、たらふく食べたいという欲求は誰にでも備わっているものですが、行き過ぎれば精神的なコントロールが全くきかない欲望の暴走に陥ってしまうでしょう。テレビをつければ美食を謳う番組や食を面白おかしく扱う番組も後を絶ちません。人の食への関心が尽きることはありませんが、楽しみとしての食、健康を保つための食、コミュニケーションの食など、食を巡る様々な場面がある中で、バランスの取れた食とは、より良い生きかたにつながる食はどういうものかを考え実践していく機会としてもラマダーンの断食を捉えてみたらどうでしょうか。



編集部より	2
恵みと、それを意識すること	3
他者を優先する精神	3
祈りのある毎日へ	4
スコーン	4
ハヤー（謙虚さ）	5
預言者ムハンマドが教えた予防医学	9
リュックの先生 東へ西へ 7	11
年老いた人々へのメッセージ	14
素晴らしい才能を持つ子供たち	17
特別な月、ラマダーン	22
『大きな鳥と小さな鳥』 Uccellacci e Uccellini	23
不安と趣向	25
祈り	26
ラマダーンについて	27





## 恵みと、それを意識すること

アッラーは人々に、数え切れないほどの恵みを下さっている。これらのうち最も大きいものの1つは、その恵みを意識でいる、というものである。

健康は、健康な人の背にある貴重な恵みである。病気になった人のみがその価値を知る。

アッラーの、人々へ与えられた最大の恵みは、信仰という恵みである。この偉大な恵みへの感謝は、アッラーに対抗しないこととなる。

あらゆる恵みに対し、その恵みに応じた感謝を行なうことは、価値を理解できる、ということの意味する。

しばしば、無知な人々が幸福で豊かであり、英知を持つ人々が物質的な困難さを味わうということは、この世界の恵みが人の真の価値にふさわしい形ではもたらされてはいない、ということを示している

ある品の価格を知るのではなく、価値を知ることが大切である。

アッラーの恵みは、その偉大さの規模に適ったものであり、感謝の要求は、恵みとして与えられたものの価値に適うところとなる。

人をアッラーから遠ざけるような恵みは、最大の災いである。

## 他者を優先する精神

人それぞれの努力は、その価値によって決まる。自分のことのみを考える人は人ではないか、何か不足した存在である。人間性へと至る道は、他者を思うあまり自分を忘れてしまうところを通過する。

人は、自らの恥に対しては検察官のように、他者の欠点に対しては弁護士のようにあるべきである。

成熟した人、そして真の親友とは、地獄からの出口で、そして天国への入り口ですら、「どうぞ。」と言うことができる人である。

真に人である人とは、どのような条件であろうと、自分の桶に乳を搾りいれる時、他の人の桶をもからのまま放ってはおかない人である。

あなたは種を蒔いて、去りなさい。誰が収穫しても、それでよいのだ。

\*\*\*\*\*

あからさまに名誉や貞節に対する敵対行為を行なう人は低俗であり、こっそりと行なう人はアッラーから恥じることを知らず、自らを知らずにいる卑俗な者である。そもそも、名誉や高潔さという感情を持たない者は、祖国への思いも持たない。

---

\* この文章は"Pearls of Wisdom"よりの訳です。



避難を望む者をまもり給うお方

恵みを求める者に恵みを与え給うお方

援助を求める者に、援助し給うお方

秘密を保とうとする者を保持し給うお方

もてなしを望む者をもてなし給うお方

正しい道を求める者に道を示し給うお方

困難な者に恵みを与え給うお方

救いを求める者を救い給うお方

助けを求めて叫ぶ者を静め給うお方

罪の赦しを乞う者を赦し給うお方

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎からお助け下さい。\*

## レシピコーナー



### スコーン

材料： [A] 薄力粉 … 250g      ベーキングパウダー … 小さじ2と1/2      三温糖 … 20g  
塩 … ひとつまみ      バター（食塩不使用） … 70g      溶き卵 … 1コ分  
牛乳 … 約70g      つやだし用牛乳 … 適量

1. ボウルにAを合わせてふるい入れます。
2. (1)に1cm角に切ったバターを入れて指先でつぶしながら粉と混ぜ合わせ、そぼろ状にします。
3. (2)の粉類を脇に寄せて中央をくぼませ、卵と牛乳を入れます。全体を切るようにして混ぜ合わせて、ひとまとめにします。ラップに包み冷蔵庫で約30分間休ませます。
4. 厚さ1.5cm位に伸ばし、直径5cmの丸型で抜きます。シートを敷いたオープン皿に間隔をあけて並べます。
5. 表面につやだし用の牛乳をハケで塗り、オープンで焼きます。オープン 200℃-約12分。

\*偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌルカビール）には、祈願（きがん）、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的體が必要です。本来、偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌルカビール）が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。



## ハヤー（謙虚さ）\*

ハヤーは単語としては羞恥心や内気、不適当なことや無作法な言動を慎むことを意味しますが、スーフィーたちは、アッラーに対する畏怖や畏敬の念から、アッラーを怒らせないようにしようとする人々のことを描写するときにこの言葉を使います。ハヤーによって、人はより注意深く自己コントロールできるようになります。そして、このような抑止が謙虚さから来るものであれば、それはアッラーに対して相応しい敬意を払うことにつながります。もしこのような感情が家庭や周囲の環境のために失われてしまっていたら、それを取り戻すのはとても難しいことになってしまうでしょう。

上記の説明において、謙虚さは2つに分類することができます。人がもって生まれた本能的な羞恥心と、信仰から生まれる謙虚さです。前者は人を恥づかしいことや無作法なことをするのを妨げるもので、後者はイスラームの重要な深い部分にある側面を構成するものなのです。

本能的な羞恥心とイスラームに基づいた謙虚さを合わせることで、恥づかしい行為や無作法な行為からの最も優れた予防手段が作られます。どちらか一方ずつでは、その力は弱まるか完全に失われてしまうかもしれません。もしこの生まれ持った羞恥心が、信仰から来る『かれは、アッラーが見ておられることを知らないのか。(聖クルアーン凝血章 96 : 14)』のような章句で表されている自覚や、『本当にアッラーはあなたがたを絶えず見守られる。(婦人章 4 : 1)』のようなアッラーが常に監督されているという意識と合わることがなかったら、それは長続きはしないでしょう。なぜなら、その持続は信仰に依るものだからです。この謙虚さと信仰の本質的な関係は、アッラーの預言者によって表現されています。彼はある教友が謙虚さについて他の人にアドバイスしているのを聞き、「やめなさい。謙虚さは信仰から来るのだから。」と言われました。また、「信仰は七十ほどの側面を持ち、謙虚さはそのうちの一つなのです。」とも言われました。

これらのハディースから言えることは、他の生来の美德という種と同じように、羞恥心という自然の感情は、アッラーの知識を生み出す力と方法によって強化された限度にまで伸びるということです。そしてそれは、過度の現世的欲求に対する障害という精神生活の一側面になるのです。もしこの感情が信仰とアッラーの知識によって強化され伸ばされることがなく、もしくは、アッラーが常に監視されているという意識によって強化されることがなく、快楽と現世的喜びの中に追いやられてしまったら、個人や社会は、真に人間である者は誰もが人間であることを恥づかしく思ってしまうような、無作法と逸脱の個人や社会となってしまいうでしょう。預言者ムハンマド（彼の上に平安と祝福あれ）は謙虚さを完璧に示す人で

\* この文章が “Key Concepts in the Practice of Sufism” よりの訳です。

もありましたが、次のようにおっしゃいました。「もし謙虚さの欠片も持たないのであれば、望むことを何でもしなさい。」

ハヤー（謙虚さ、羞恥心）とハヤート（人生）という言葉は語源を同じくします。これは、謙虚さが生きている心のしるしであり、心の生氣は持ち主の信仰とアッラーの知識に依存していることを示しています。もし心が絶えず信仰とアッラーの知識を与えられることがなかったら、生き生きとい続け、同時に謙虚であることはほとんど不可能と言ってよいでしょう。

ジャーナイド・アル＝バグダーディによると、ハヤーはアッラーが授けてくださった物質的及び非物質的な恵みを認識することと、自分の欠点や短所を自覚することを意味します。ドゥ・ル＝ヌン・ル＝ミスリは、ハヤーは自分の罪のために人が常に羞恥心を持ち、それゆえに自分の行動について注意深くあることを意味すると言っています。他の精神的に卓越した人は、ハヤーはアッラーが自分をどのように扱われているか決して忘れないことであり、アッラーは言動も思考もすべてを見ておられるという事実によって自分の人生を歩むことだと定義しています。

アル＝クシャイリのアル＝リサラには、アッラーが「おおアダムの息子よ。私の前でお前が謙虚さと羞恥心を持ち続ける限り、私は人々がお前の欠点を忘れるようにしよう。」とおっしゃられたと記されています。アッラーはまた、預言者イエス（彼の上に平安あれ）におっしゃられました。「おおイエスよ。自分自身の自我に対してまず助言せよ。そしてその助言が受け入れられたら、それから他人に助言してよい。そうでなければ、お前は私の前で自分自身を恥ずかしく思うであろう。」

謙虚さや羞恥心はさまざまに分類することができます。たとえば、感じる主体による分類です。

- ・アダム。彼は許されるまで、罪悪感を抱き続けました。

- ・天使たち。彼らは、昼夜を問わず崇拝することを止めないのにも関わらず、「あなたに称えあれ。私たちはあなたに対する崇拝として足るほどには、崇拝することができません。」という言葉に表されているように、アッラーに対して十分な崇拝を心から捧げることができなと感じます。

- ・アッラーの知識において非常に優れている人々。彼らは、自分たちのアッラーの知識の深さにも関わらず、「あなたに称えあれ。私たちはあなたに関する知識として足るほどに、あなたを知ることができません。」と言います。

- ・精神的レベルの高い人々。彼らは、現世的な欲求や野望に負けることは決してありませんが、アッラーへの畏敬の念の中でハヤーを感じます。

- ・アッラーに対する確信が強い人々。彼らは常にアッラーの存在を無限に近くに感じていますが、アッラーと人間との無限の距離があることにハヤーを感じます。

・アッラーを愛する人々。彼らはアッラーの愛に足るほどにアッラーを愛することができないことに、不安を感じてそこからハヤーを感じます。

・自分に十分な誠意が欠けていると感じ、何のためにアッラーに礼拝を捧げなければいけないのかわからない人々。

・アッラーによって高められた人々。彼らは人間として、最も素晴らしい被創造物という栄誉を得たことを自覚していて、彼らの判断では、そのことと<sup>かいい</sup>相容れないことや、自分を責めるのに値することのためにハヤーを感じます。

謙虚さの第一段階は、自分自身をアッラーに見られているように見ることです。これが、自己コントロールや自己監督をアッラーの基準によって実践することです。これを実践することによって、羞恥心や謙虚さが生じ、それによって思考や行動でとても用心深くなるようになるのです。このようなレベルの謙虚さは、その感情や思考によって、生き生きとしていると考えられている人々に見られるものです。

第二段階は、アッラーの近くにいることを自覚することと、常にアッラーの前にいるという感情に比例したものです。これは、常に『あなたがたが何処にいようと、かれはあなたがたと共にあられる。(鉄章 57 : 4)』について意識している人々に見られます。この章句について、預言者ムハンマド（彼の上に平安と祝福あれ）は次のようにおっしゃられました。

「全能のアッラーの前にいるように謙虚でありなさい。アッラーの前にいることに足るだけの謙虚さで。このレベルの謙虚さを与えられ祝福されている人々は、自分の心とその中身を、あたかも自分のお腹とその中身のように、コントロールするでしょう。彼らは常に死と死後の腐敗について覚えているでしょう。来世を望む者は現世の装飾を放棄するでしょう。それを成し得る者は、アッラーの前にいるに足るだけの謙虚さを感じることができるのです。」

第三段階には、すべてのものに対するアッラーの絶対的支配を深く感じることや、最終目的地を求めながら精神的に深い生活を送ることで達成することができます。『本当にあなたの主にこそ、帰着所はある。(星章 53 : 42)』この最終目的に辿り着くための努力は、アッラーへと続く道を歩み続けることに捧げた一生涯をかけて続くのです。

人の謙虚さのレベルはその人の本当の人間らしさによって定まります。もしアッラーの道の旅人が、永遠の来世のために必要なように自分の人生と行動を正し、最高レベルの謙遜と謙虚さのうちに人生を送ることができなかつたら、次の詩に述べられているように、彼らの存在は個人的な恥であり他人にとっては重荷になるのです。

アッラーによって、人生にも現世にも良いものはない。

謙虚さが消えてしまったときには。

謙虚さはアッラーの性質であり謎であります。謙虚さが根本的に誰につながるのかをもし人々がわかっていたら、もっと注意深く、敏感に行動しているでしょう。この点については、次のことと関連するでしょう。

復活の日、アッラーは一人の高齢の男の人に自分の現世での行いについての説明を求めました。「どうしてお前はこんな罪やあんな罪を犯したのだ？」その男は自分がそれらの罪を犯したことを否定しました。そして、最も慈悲深い御方アッラーは天使たちに命令しました。「彼を楽園へ連れて行くように。」天使たちは、アッラーがその男がそれらの罪を犯したのをご存知なのに、なぜそう命じられたのかを知りたがりました。全能のアッラーは答えられました。「私は知っている。だが、ムハンマドの共同体に属するものと思って彼の白い髭を見ると、私は彼が嘘をついていることを知っていることと告げることを恥ずかしく思うのだ。」

カンズ・アル＝ウマルに記されていることには、天使ガブリエルがこの話をアッラーの預言者ムハンマド（彼の上に平安と祝福あれ）に伝えたとき、彼の目は涙で溢れ、彼は悲しんで「全能のアッラーは私の共同体の白い髭の者たちを罰することを恥ずかしいと感じられるが、私の共同体の白い髭の者たちは罪を犯すことを恥ずかしいとは感じないのだ。」と言われました。

次の詩でまとめにしましょう。

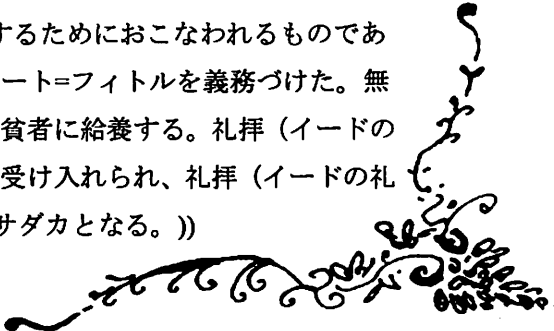
ハイーイ（最も謙虚な御方）はアッラーの美名の一つである。

だから努力して謙虚さを得なさい。



### ザカート＝フィトル（断食明けのザカート）

ザカート＝フィトルとは、貧しい者と裕福な者をイードの日に親しく結び付け、間近に迫ったイードをすべてのムスリムが迎えるための喜びを与え、また、齋戒の月の間の無意味な言動・行動から浄化するためにおこなわれるものである。ハディース（アッラーの御使いは、ザカート＝フィトルを義務づけた。無意味な言動・行動の罪から齋戒者を浄化し、貧者に給養する。礼拝（イードの礼拝）の前に支払った者は、ザカートとして受け入れられ、礼拝（イードの礼拝）の後に支払った者は、サダカとなる。）







## 預言者ムハンマドが教えた予防医学\*

### 10. 内部の出血

聖アーイシャは語っておられる。「ある日、ファーティマ・ビンティ・エビーフベイシュが預言者ムハンマドを訪れ、次のように言った。『預言者よ。私の出血がぜんぜん止まりません。ずっと続いています。礼拝はできないのでしょうか』預言者ムハンマドは答えられた。『いや、それは月経の出血ではなく、血管の異常によるものでしょう』<sup>†</sup>

それから何世紀もが過ぎた。我々はやっと、月経の出血が内部の出血によるものであると知り、驚きを新たにしている。今日の科学研究によってやっと明らかにされたこの問題を、預言者ムハンマドはその時代にどうして知りえたのであろうか。それはアッラーが知らされたからに他ならない。アッラーが教えられ、だからこそ知ることができたのである。これまでに過ぎた長い年月は、預言者ムハンマドの言葉にさらに深さを増すことになった。今日、科学者は言う。「この言葉を語った者は、他の何者でもなく、預言者でしかあり得ない」

### 11. 酒は健康をもたらさない

ターリク・ビン・スワイドは語っている。「私はある病気を持っていて、酒が禁じられるまではその持病の治療のために酒を使っていた。禁止されてから、私は預言者のところに行き、事情を説明した。そして、私の場合は酒が許されるかどうかを尋ねた。預言者ムハンマドは言われた。『いや、酒はそれ自体が一つの病気である。決して治療にはならない』<sup>‡</sup>

世界中で行なわれているように、トルコでも酒に対するキャンペーンが行なわれており、科学者たちが講演している。彼らが言っていることは一つの点にまとめられる。すなわち、酒はほんの一滴であっても、人間に精神的、肉体的ダメージを与えるということである。預言者ムハンマドはこの件についても、何世紀も前にすでに取り上げられ、酒がそれ自体一つの病であることを語られているのである。

\* この文章は“Prophet Muhammad: Aspects of His Life・1”よりの訳です。

† Bukhari Wudu” 63; Muslim Hayz 62; Abu Dawud, Taharah 109

‡ Muslim, Asribah 12; Ibn Maja, Tib 27

## 12. 割礼

預言者ムハンマドは、10の事項を被創造物の摂理とされている。その一つが、割礼である。<sup>\*</sup>

今日、知識人たちは何と言っているだろうか？ 彼らも同じことを言っていないだろうか？ つまり、包皮は不潔さの元であり、雑菌の温床になったり、傷ついたり、癌のかかる可能性を高めたりといったリスクを負うものである。そのリスクから逃れる手段が、割礼なのである。

事実として、この問題で西洋は我々の中の無知な者たちよりもさらに先を行っているのである。今日、アメリカやイギリスで割礼をする者は何百万にもぼっているのだ。

この件に関して、私の頭に思い浮かんだ、ある言葉を紹介したい。「西洋は今、イスラームの子供を身ごもっている。オスマントルコ帝国も、西洋人である子供を産み落とすだろう」<sup>†</sup>

今から7～8十年前に語られたこの言葉の、片方は実現した。そして我々は今、希望に満ちて、二つめの出産を待っている。陣痛はひどくなってきているようである。新しく生まれる子供の、よい知らせに満ちた産声は、インシャラー、近く聞かれることであろう。

ここまで、預言者ムハンマドの、そして他の預言者たちの正当性について見てきた。全ての預言者は、正しく真実に満ちている。彼らの人生で嘘はあり得ない。もし彼らに悪い点があったなら、誰かを正しい道に導くことは不可能である。彼らは、人々を正しい道に招き、天国へ続く道を示すためにやって来たのである。

そしてここで我々が学んだことは、預言者ムハンマドの正当性が、何千もの証拠によって証明できるということである。ここでは、預言者ムハンマドの正当性の証拠を三つの大きなグループに分けて示したが、これはもちろん我々が考えたことに過ぎず、このお方の正当性はこれ以外にも何十万もの証拠でもって、全く別の形で説明することもできる。第一、このテーマを誰が締めくくることができようか。最後の審判の日まで、彼の語られたことは真実となって現れ続け、それぞれの時代の人々は、彼の正当性をそれぞれに違った深さで理解し、彼と向き合うだろう。

あの世、と言われる世界では、預言者ムハンマドの正当性が、完全に明らかになり、全ての人がそれを見るであろう。彼の人となり特性、その名前の示すものなどを、全ての人がそれぞれの魂の段階に応じて、必ず見るであろう。そして彼の言葉が正しかったことを理解するであろう。天国も、地獄も、そこでの物事も、全て預言者ムハンマドが我々に語られたとおりの形で我々の目の前に現れるだろう。そして、それらもまた、永遠なるその言葉で、預言者ムハンマドに、あなたの言うことは正しい、と言うであろう。

---

<sup>\*</sup> Muslim, Taharah 49, 56; Abu Dawud, Taharah 29

<sup>†</sup> サイド・ヌルスィ、伝記, p56



### 「一人でたたかってきたTくん」

T病院に入院していたTくんが1学期もあとひと月という7月のはじめに息を引き取りました。

教育相談の時の話では、生後9ヶ月の時に、お風呂でおぼれて重い脳障害が残ったということでした。重い脳障害というのがどんなものなのか、すぐにはびんとこなかったのですが、学習を開始して、はじめてその言葉の意味を、身をもって知らされたような気がしました。

Tくんは目を閉じることができませんでした。第1印象として最初に感じる違和感です。目が閉じられないというのはどんな障害からきているのだろうと考えました。体を動かすことができないということの意味について考えさせられたりもしました。

次に感じる違和感は、彼の身体にくっついているたくさんの管（チューブ）です。

まず空気を送っている管です。自分で呼吸することができないので、のどのところに丸い穴をあけて、カニューレという管をさしこみ、そこに空気を送っているのです。耳を近づけると、規則的なこすれるような音が聞こえてきます。その管の先にはかなり大きな機械があります。空気と適度な湿り気を送る装置なのです。

それから、食事を送っている管です。Tくんの場合、胃や腸の機能の関係から時間を決めて栄養を摂るのではなく、枕元に自動注射器のようなものがおいてあり、24時間をかけて少しずつ少しずつ注入するようになっています。

さらに胸とおなかの3カ所に心電図のモニター用のぺたっと貼る丸い絆創膏のようなもの？がつけられていて、上の棚にあるモニター画面に直結しています。

また、足の親指のところに血中酸素濃度をサーチする赤外線を発している妙なものが絆創膏で巻き付けられています。それも白いコードで上の棚にあるモニターにつながっています。

それから痰の吸引チューブです。壁にくっついた瓶のところまでチューブがつながっていて、先端の細いチューブは鼻の穴の中へ入っています。「ジュルジュル」という音が聞こえたり、「ゴー」という音になったり、この装置も彼と接する際に目を引く存在です。

彼は自分で体を動かすことは全くできません。だから、何もしないでおくと、いつまでもじーっと上を向いたままなので、時々姿勢変換をしてもらっています。それでも、上を向いた姿勢がほとんどなので、事故に遭遇してから8年、次第次第に彼は薄べったい身体になってきました。

頭も丸いボールをぎゅーっと上から押したような平べったい形になっています。ちょうど、アンパンマンのような形です。こんな表現をすると彼に怒られるかも知れませんが、生前枕元にアンパンマンの

人形がおかれていて、どっちがTくんなのかわからないねと言ったときも黙って聞いてくれていたので、ありのまま表現することを許してくれるものとして書き続けます。

彼は、いつも目を開けているので、目が乾いてしまいます。だから、ワセリンのような透明ジェルが目に塗られていることが多かったです。時々、目が閉じられているときがありました。それは彼が閉じたのではなく、看護師さんが目の周りの筋肉の拘縮を防止するための処置として行ったものです。上まぶたと下まぶたをぎゅーっと引き寄せて絆創膏でくっつけます。そんな時に授業で行くと、Tくんの顔がまるで別人のように感じました。

彼の学習は、わずかに残っている機能を見つけだして、その機能で人とのコミュニケーションを少しでも復活できないかと言うのが大きなねらいでした。

残存する機能を見つけだすことから彼との学習が始まりました。

授業の開始を告げ、肩や手など、どこかしら彼の身体に触れると緊張して身体に力を入れるということが分かりました。さらにお母さんからは、顔や額の生え際をさわられると顔を真っ赤にして緊張するとも言われました。

声をかけても聞こえているかどうか分かりません。ただ、時々聞かせていた竹の縦笛での曲の演奏の際に、私が吹き方を間違えて「ピー」という甲高い音を出したときに、身体に触れられた時と同じような反応（体に力を入れ、少し顔を赤らめる）を見せたことがありました。このことは、私にとって、彼の聴覚が何かを聞き取っているという証拠になりました。

第2の課題は、姿勢変換でした。私は彼の上体を起こしてみることにしました。機能訓練士の方からのアドバイスもあり、今のままでは、骨粗鬆症と同じ状態なので、何とか彼の骨に重力を加え、少しでも骨を強くしようと考えたからです。少しでも上体を起こすことで、脊柱や、座骨に彼自身の重さが伝わり、そのことで骨を強くできると考えました。それから、彼の体の中を流れる血液の流れ方や血圧にも何らかの影響を与えるだろうと考えました。ずーっと仰向けの状態で寝ているということは、おなか側より背中側にたくさんの血が流れているはずで

それから、同じ高さに頭があるということは心臓から脳へ送り出す血圧の変化が乏しいのではと考え、たとえ30度でも体を起こし、その後、体を下げるという動きを与えることで、彼の体を流れる血液の流れをリフレッシュできるのではと考えました。

さらに血液だけでなく、彼ら寝たきりの患者さんたちの大きな悩みであり、看護する側から見れば大きな課題である「痰」の動きにも体を動かすということは何らかのいい影響を与えるのではと考えられました。

小学1年生の時の1学期に大腿骨の骨折がありました。看護の際や機能訓練の際など何ら思い当たる節がなく、原因が分かりませんでした。おそらく寝ているときに自然に折れたのではないかということでした。体を切開することなく小さな穴を何カ所かあけるだけで、骨をボルトで固定するという最新の手術を受けました。それだけ彼の骨はもろいということになったので、完治するまではもちろんのことしばらくは足を触らないようにというお達しがありました。

二学期になり、10月に彼の足から固定していたボルトが除去されました。足を触る際には、必ず両手で持ち、急な動きや無理な動きは絶対にだめと言うことで、ゆっくりとした無理のない範囲での関節の動き程度は許可されました。

それから少しずつベッド上での彼の上体があがってきました。最初は少しでも上体が上がると真っ赤な顔をして力を入れていたのですが、体操の曲にあわせて、毎時間上体起こしに取り組んだせいか、まず、彼の上体を抱え上げようとする最初の接触の時に緊張が少なくなり、しまいには後頭部に私の腕を入れても力を入れることがなくなってきました。

ある程度まで上がってくると、ベッドの上に私も上がり、彼の背中側に回って私の体で彼の上体を支えることができるようになってきました。これまでベッドサイドから手と腕の力で彼の上体を支えていたのが、ベッド上で彼の後ろに回って上体を支えることで、私の手の動きに自由が生じました。

それから、わずかでも角度をつけて座っている時間を、少しずつ延長していきました。起こしてから寝かせたときの変化にも留意し、血圧の関係や、脳圧の関係で何らかの異変（特に彼の場合は顔を赤らめたり、体全体の緊張）が見られた場合は、看護師さんに様子を報告し、学習の記録に細かく記入して、彼にとって無理な課題にはならないように常に配慮してきました。

要するにこれは当然のことなのですが「彼が嫌がることはしない」というコンセプトで学習を続けました。

やがて座った状態で本の読み聞かせができるようになりました。私が体を密着させているので、私の発する声が、耳からだけではなく、体を通して伝わったと思います。

この体勢でマイナスの反応が見られなかったので、調子のいいときには、できるだけ座った状態で何らかの課題をこなすようにもなりました。筆を持つ、スタンプを押す、紙を破る、等々いつも私との共同作業ですが、今から思うとあまり嫌がらずにできていたように思います。

Tくんはお風呂が大好きでした。「どうしてそのことが分かるのか？」と、時々考えるのですが、暖かいお風呂に入って手足の力が抜けているときの、Tくんを見ると「気持ちよさそう」と感じたのです。にっこり笑っているわけでもありません。いつもの表情で、いつもの体でしたが、頭を洗ったり、体を洗ったり、浴槽の中でゆらゆら手や足を動かしたときなど、本当に「気持ちよさそう」と感じたのです。

Tくんの亡くなった朝、病院へ行くとお母さんが「今、お風呂に入れてもらいました。お風呂が大好きだったので、喜んでいると思います。」と、おっしゃいました。個室に移されたTくんの遺体は暖かく、やわらかでした。

お通夜の時に父さんが「Tは病院で一人でがんばってきた。まだまだ、がんばってほしかった。Tの気持ちを考えるとひじょうにくやしく思います。」と挨拶されました。

この8年間、彼は一人で闘ってきたのです。病気と闘い、緊張と闘い、感染と闘い、骨折と闘い、生き続けるために懸命にがんばってきたのだと思います。

Tくんのご冥福を心からお祈りいたします。



## 年離れた人々へのメッセージ

## 第7の希望

初老に差しかかった頃のこと、旧サイドの笑みが新サイドの泣き声に変わった。

そのころ、アンカラに住む現世を好む人々が、私を旧サイドだと思い、アンカラへ来るように望んだ。そこで、私は出かけた。晩秋の頃だった。私よりももっと歳をとり、すり減り古びてしまったアンカラの城壁に登ってみた。その城壁は、数々の凍りついてしまった歴史的事実を私に語りかけてくるかのようだった。(人生を)一年に例えれば、老年期を示すであろうその季節に、私の古い、城壁の古い、人間の古い、誉れ高きオスマン帝国の古い、そしてカリフ制の死、この世界の老いが<sup>さびしく</sup>寂寞と悲哀と別離の念を私に抱かせた。

その高くそびえる城壁は、過去の谷間をそして、未来の山々を私に指示していた。そこで私は示された事柄を見た。その一つ一つが私を取り囲んだ。(老いという)暗闇の中で、アンカラ滞在中最も私の魂が暗くなるのを感じたため、私はある種の光、癒し、希望を探し始めた。右、つまり過去を、過ぎ去った時を眺め、慰めを探し求めた。過去は私や父、祖先そして、私の家族の人々に巨大な墓場として姿を現した。喜びの代わりに恐怖を私は感じた。

私の左手、つまり未来に治療薬を求めてみた。見受けたところ、私や私に似た者達や次世代の人々の大きな、真つ暗な墓があるようだった。親しみさの代わりに恐ろしさを感じた。

右から左へ見回してみると、そこでは死への準備をしている日が見えた。それは、気楽な歴史上の出来事を考えている私だったが、その準備の日に<sup>ひんし</sup>瀕死の状態、まさに魂が抜き取られていく時の苦しみ、痛みを感じている私自身の亡骸を墓へと運んでいる棺が見えた。

このため、より悲しくなり頭(かしら)を上げ、私の一生涯を示す木の天辺を見上げた。見るとその木には唯一の実がなっていたが、それは私の遺体を意味するものであり、その実は木の上の方に生っていたのだった。その実は私を見ていた。

そこで、向きを変え、頭を下へ向け、その私の一生涯を示す木の根元を見た。見受けたところ、その下にある土は、私の亡骸を埋めた土と創造の源である土とが混在した状態であった。その土は、多くの人々の足で踏みつけられたようであった。このことは、治療薬どころか、私の苦しみを倍化させた。そのため、やむをえなく後ろを振り向いた。見えたものは、はかない、つかの間のこの世が、何も存在しない谷々や無の暗闇の中を駆け回っている姿だった。私の痛みを治す塗り薬を探していたのだが、その代わりに毒薬

を加えられたように感じた。

そこで、良き事を何か得たかったため、前を見た。目をはるか遠く、前方へ向けた。見えたのは、墓の門が道の上方で丁度開かれた姿だった。口を開けて、私を見ていた。その背後には永遠の世界へと続く、大通りがあった。その大通りを歩む集団が、はるかかなたまで続いているのが目に映った。

この六つの方向から、差し迫ってくる恐怖に対して、私は抛り所となる場所と身を守るべき武器が必要となるわけだが、無価値と見えるわずかな意志の力の他に、何も持っていないのだ。限りない敵たちと数々の皆悪に対し、人間の武器といえ、あまり力強いとはいえない僅かばかりの意志の力だけだが、それは不完全で狭く弱く、新しい発見もできず、ただ骨折りしか残らない。過去に戻ることも出来ない。そこから迫っていくと、悲哀を消し去らせることも出来ない。また、未来に入ることも出来ないし、そこから迫ってくる恐怖を防ぐことも出来ない。過去や未来における私の骨折り、苦しみや悲しみには、何の価値もないことを私は知ったのであった。

この六方向から迫り来る恐怖、孤独、暗闇、そして絶望の中でうごめいていた正にその時、突然明白なる神意を伝える奇跡のクルアーンと天空において輝くイーマーン（信仰）の光が救済に駆けつけた。

それは、六方向から一斉に光を放ち、辺り一面を明るくした。私の感じた恐怖の数々と暗黒が百倍増した。しかし、その光はそれらに対しても充分明るく、私を救うのに十分有益であった。恐怖の全てを一つずつ悟るように安らかさに変え、孤独の一つ一つを親密さへと変えた。その仔細は次の通りである。

イーマーン（信仰）は、恐怖に満ちた過去の巨大な墓の姿を打ち砕き、親しみ深く、光り輝く集会場、友人達の集まる抛り所であった。まるで、私達が目の当たりにしたかの様に、確かに真実であると示してくれた。

イーマーンは、気づかぬうちに、最も大きな墓の姿として現れる未来を愛すべき幸せに満ちた宮殿の中で、慈悲深きアッラーの僕となるために準備された宴会の集会場となることを明確な知識によって示してくれた。

イーマーンは、気づかぬうちに棺の姿で現れる準備の期間とその準備の日の棺のような姿を消し去った。そして、その準備の日を来世のため、商売する店として、また光輝く慈悲あまねく客間（現世）として、目の当たりにするかの様な確固たる形で示した。

イーマーンは、うかつにも私の生涯を意味する木の頂で、私の亡骸の形で見えた一つの実が、遺体ではなく永遠の生活への到達であることを示してくれた。永遠の幸せを望む私の魂が、古びた巢から星々を旅するために巣立って行ったことを、煙から火を見出すごとく、明らかに示してくれた。

イーマーンは、私の遺骨の埋められた創造の源である土を守られることもなく、足で踏まれただ無駄になった遺骨の埋められた土ではなく、慈悲の扉と天国の大広間を覆う仕切りとして、信仰の秘められた真実によって顕してくれた。

イーマーンは、気づかぬうちに、私達たちの背後で、無の暗黒の中を駆け回るこの世の状態をクルアーンの神秘によって示した。

目の前に現れた暗闇の中で、回転するこの世とは、その役目を終え、その意味を説き明かし様々な成果がそれ自身に相当する形で残されたものであり、その一部は真の主の御名と属性を知らしめる存在であり、完全無欠な神の刺繍が、縫い表された数々の頁であることを知らしめ、この世の存在とは何かを明確な知識によって、イーマーンは示した。

イーマーンは、前方で目を見開き、私を見つめる墓とその墓の後ろにつづく私達に至る大通りを、光輝くクルアーンによって明らかにし、その墓は、井戸の扉ではなく光の世界への扉へと変化した。そしてその道とは、空、無の国ではなく、光の国、永遠の幸福へ至る道であることを示した。それは、十分に満足を与えるものであり、私にとって、治療薬、塗り薬ともなった。

イーマーンは、手の中に（大変）徒労に終わる骨折りだけが残るわずかながらの意志の力の代わりに、数限りない敵たちと数多くの抑圧に対し、永遠の力に頼り限りない慈しみ結びつくため、無価値に見えるわずかな意志の力に、確固たる証しを与えた。おそらく、そのイーマーンはわずかな意志の力によって証しとなっている。一方、わずかな意志の力という人間の武器は個人にとって実に狭く、弱く、無に等しいものである。しかし、一人の兵士は弱いが、祖国のために使う時の何千倍もの力を発揮し、見事事を成し遂げる。そうであるなら、イーマーンの秘められた真実によって、力のない僅かばかりの意志の力は、真の主の御名によって、彼の道のために使われるならば、五百年程もの拮据を見せるものであり、楽園を得ることも可能になる。

イーマーンは、過去と未来に影響を与えることのできない無力な意志の力を並び替え、そのもの手から取り去り心と魂に従わせる。

心と魂の活動領域は、物質のように準備期間が限られていないため、古（いにしえ）の過去からはるか彼方の未来まで活動領域が広いため、その無価値に近い意志の力は僅かではなく、多大の力を発揮するのである。過去の最も深い谷々でさえ、信仰の力によって入ることができ、悲哀が抑圧を追い出すことが出来たように、光り輝く信仰は未来の最も遠い山々まで届き、恐怖を消し去るのである。

まさしく、私のように老いのつらさを感じているご老人達、ご老婦達。私達は、イーマーンを持つ者達である、アルハムドゥリッラー。イーマーンはこの上ない輝き、甘美さ、喜び、楽しみが含まれる宝庫である。そうであるならば、私達の老いは、この宝庫の中に私達をより良く送り込んでくれるため、信仰を持つ人は、老いに対して不平を持つべきではなく、より多く感謝すべきである。







自分の子供に特殊な才能があることを発見したとしたら、たいていの親は自尊心と興奮、不安が入り混じった気持ちでそれを歓迎するでしょう。それから、その子供の養育にどのように向き合ったらよいかわかると専門家の助けを求めるかもしれません。しかし得られる支援はごく限られたものだということだけに分かるでしょう。

### 天才とは何か？

まず最初に天才とは、創造主によってどの子供にも授けられた<sup>ひまろ</sup>弧光のような生得的特質が特別の度合いに達していること、もしくは凝縮されていることだと理解することから始めましょう。このことは聖クルアーンのいくつかの節において強調されている事実です。例えば、

アッラーはあなたがたが何も知らない時、あなたがたを母の胎内から生まれさせ、聴覚や視覚や心（知能感情）をも授けられた。必ずあなたがたは、感謝するであろう。（蜜蜂章 16：78）

かれこそは、あなたがたのために、聴覚と視覚と心（知覚、理解力）を創られた方である。だがあなたがたは、感謝しない。（信者たち章 23：78）

ある子供に特別な<sup>てんぷ</sup>天賦の才能が備わっているのを見出すことは、我々がその才能に感謝しなければならないという特別の恩義を負っていること、またその恩義に付随してもたらされる困難や責任をも承知せねばならぬことを認識することと表裏一体をなしています。

### 天賦の才能を見極めるための指標

優れた才能がどのような現れ方をするかについて、両親が十分認識していることが重要です。この分野の専門家によって列挙されている典型的な特徴というのは数多くあります。しかし以下の一覧に示されている特徴すべてについて<sup>ひ</sup>秀でているという子供はいないようです。

1. 推理力に優れ、アイデアの取り扱いに際立った能力を示し、ずば抜けた問題解決の能力を持っている。
2. 常に知的好奇心に満ち溢れ、鋭い質問を発したり、人類や宇宙に関する並ならぬ興味を抱いている。
3. 幅広い興味の対象を持っている。その内容は知的なものであることが多い。1つもしくはそれ以上の興味対象を非常に深く追求する。

4. 話し言葉もしくは書き言葉において語彙の質量ともに著しく優れている。

5. 熱心に読書し、本人の年齢をはるかに超えた内容の本を理解する。

6. 覚えがよく、また早い。学んだことをよく記憶している。重要な内容や概念、原理を思い出すことができる。つまり理解が容易である。

7. 音楽や美術、演劇などの分野で創造力を示し、想像力豊かな表現力を発揮する。細やかで快活なリズム、動作、体のコントロールといった能力を示す。

8. 注意深い論理的思考を要する数学の問題に対する洞察力を発揮する。数学的概念を容易に把握する。

9. 長時間にわたって集中力が持続し、教室活動においては卓越した責任感と主体性を持って臨む。

10. 己に合った現実的かつ高水準の目標を設定し、自らの取り組みを評価したり修正したりする際には自己批判的態度をとる。

11. 知的な作業には率先してとりくみ創意工夫を試みる。ものの考え方が柔軟で様々な視点から問題を検討することができる。

12. 鋭い観察眼を持ち、新しい考えには敏感に反応する。

13. 社交的な振る舞いができ、大人としっかりとしたやり取りができる。

14. 知的な難題に喜んで取り組む。巧妙なユーモアのセンスを示す。

天賦の才能を与えられているというのは称賛すべきことでもなければ軽蔑されることでもない、ということに留意すべきです。重要なのは人が自分に与えられた能力で何を行うかということです。親業が続く期間中、心得ておくのが賢明だと思われるのですが、最も健全な長期的ゴールは、名声や富を得たりノーベル賞を受賞する子供なのではなく、子供が自らに与えられた能力を生産的に使うことのできる満ち足りた大人になることだという考え方です。

才能を与えられた子供がその才能を開花させられるよう、子供時代から青年期の初めにかけては我々が環境を整えてあげるべきです。我々ができる取り組みは以下のようなものです：

- ・ 子供が日常的に発する質問にはすぐ反応してあげる。

- ・ 子供とは親や教師が見逃している様々な関連性を見出しているものなので、子供の突飛な考えにも偏見無く耳を傾け、敬意を払ってあげる。

- ・ 子供が自らの考えを何かに適用したり他人とやりとりすることで検証してみるよう、仕向けてあげる。

- ・ すぐに評価を出されたり先入観を持たれたりする心配を持たずに子供が学んだり考えたり発見したりできるよう、確保してあげる。

## 英才教育

子供や青年が持つ才能を効果的に育成していくには家庭と学校の協力的関係が必要で、そこには相互尊重や、その子供に関する考え・気づきを継続的に共有していこうとする姿勢がなければなりません。

才能ある子供たちは学齢に達した時点ですでに、学校で最初の頃に習う事柄の多くを知っている場合もありますし、覚えが早いこともありますので、ある種の、教育の速度を上げる措置が必要となってきます。場合によって、また子供によっては飛び級が最善の策となるでしょう。その子を興味の似通った年上の子供たちと一緒にさせることが社会的にも知的にもためになり、より適当なカリキュラムを与えてあげる結果になるかもしれません。

ワシントン州で開かれたある会議（Gifted Leadership Conference）で提言された以下の方策は、思考面における才能と教育の橋渡しをいかにして築くことができるかを説明しています。

1. 才能ある生徒は、学校で過ごす時間の多くを同じような興味・能力を持つ生徒たちと過ごすべきである。

2. 才能ある個人のためのフルタイムのプログラムを準備できない学校では、所属するクラスから選抜された特定の個人だけを集めたグループでの授業を行うことも1つの手である。

3. 才能ある個人のためにフルタイムのプログラムがない場合、教科に関して個人が獲得した知識に応じて学年をまたがったグループによる教授を行うこともできる。

4. 才能ある生徒は個人であれグループとしてであれ、様々な形態によるしかるべき飛び級を選択肢として与えられるべきである。

5. あらゆる生徒は、概念や原理、一般化といった考えの発展がさらに促されるよう、学校での通常のカリキュラムを超えた、様々な内容の深化を伴う経験が与えられるべきである。

6. レベルの異なる生徒が混在するグループで学ぶ協同学習は慎重に行われるべきで、社会性を向上させる目的に限って使われるのがよいであろう。

7. 関係スタッフは全員が、才能ある生徒を識別し、しかるべきカリキュラムを提供できるよう訓

練されていなければならない。

8. 学びの上限を設定すべきではない（換言すれば、小学校5年生で代数学を学べる状態の生徒がいたら、システムとしてその許容にとどまらず支援しなければならない）。

9. 生徒のペースに合わせるにはコンピュータの活用が有効である。コンピュータは忍耐強く1つのアイデアを長期間にわたって確保してくれるからである。生徒がなんらかの課題により複雑な方法で取り組もうとしたときに対応できるのもコンピュータであり、生徒が使いたいと思う情報も提供してくれるのである。

### 才能ある人々のためのキャリア計画

親や教師は才能ある子供の教育面での計画については非常に関心を寄せているかもしれませんが、職業に関する計画となると特に何もしなくてもなんとかなると思込んでいるふしがあります。学生はただ単に大学の最終学年あたりで職業を選択し、目的を達成するのに必要なステップを引き続き踏んでいくものと考えられています。

残念なことですが、1つもしくはそれ以上の分野で発揮される若者の優れた才能が、職業人生における大人としての満足感や達成感へと必ずしも移行するわけではないことが次々と証明されてきています。研究によると教育から職業につながる道は平坦とは限らず、才能ある学生にとっての社会的・感情的な問題や必要性は一般的な学生のそれとは異なっているという事実によってさらに複雑になる可能性があります。

11～15歳の才能ある若者たちは、その溢れんばかりの才能がもたらす様々な問題を訴えることがよくあります。やりがいのない学校のカリキュラムや高まる期待などの問題に加え、完ぺき主義、競争力、自分自身は実感が湧かない才能に対する評価、仲間から受ける拒絶、才能がもたらす複雑なメッセージによる混乱、成功を期待する親や社会からの圧力などの問題です。中には友人探しもしくは友人選びに困難を感じ、ひいては職業でその困難に遭遇する人もいます。すべての青年が直面する発達面での問題は才能ある若者にも起こりますが、才能あるゆえに、またその才能の特質ゆえに問題はさらに複雑となるのです。カウンセラーや親はいったんこうした障害物に気付けば、その才能ある若者をより理解しやすく、支えやすくなるようです。これらの若者が、理解や、必要な調整・課題への対処、作戦に沿って立ち向かって行くことを通じて自らの才能を自分のものとし伸ばしていくために、氣遣いのできる大人こそが手助けすることができるのです。

### 結論

特殊な才能を授かった子供を育てるのは至上の喜びであり、または非常に苦悩であり、またはその中間のすべてであるかもしれません。周囲の大人は不可能といって差し支えないほどのバランスの離れ業

をやっつてのけなければなりません。無理強いすることなく子供の才能を支えてあげること、負担をかけすぎないようにしながら評価してあげること、支配せずに支持すること。費用もかかれば肉体的にも精神的にも消耗が激しいでしょうし、知的要求が厳しいでしょう。最初の瞬間に自尊心のほとぼりを感じたときには、自らの任務が多くので重度の障害を負った子供の親が直面するものと同じくらいであることを理解する親はほとんどいないでしょう。我々の世界は差異を容易には受け入れてくれません。そしてその差異が欠損とみなされるか過剰とみなされるかにほとんど違いはないのです。

特別な才能を授けられている子供にあなたが差し伸べられる助けとは、次の一文にまとめられるでしょう。それは、安全な家庭、すなわち愛されていると感じられる避難場所、そしてとりわけ差異を受け入れてあげる本物の受容、を与えてあげることです。そのようなやすらぎのある家庭という背景のもとで過ごした後は、生産性と充足感の人生を併せ持つことができるような大人となっているでしょう。

#### 役に立つ読み物

BERGER, S. (1989) College Planning for Gifted Students, The Council for Exceptional Children Reston, VA.

COX, J., DANIEL, N. & BOSTON, B. (1985) Educating Able Learners, University of Texas Press, Austin TX.

FREDERICKSON, R.H. & ROTHNAY, J.W.M. (1992) Recognizing and Assisting Multipotential Youth, Columbus, OH: Merril.

KERR, B. (1985. September) 'Raisins, the Career Aspirations of the Gifted', The Vocational Guidance Quarterly, 32, pp. 37—43.

KAUFMAN, F. (1988) 'Mentors Provide Personal Coaching', Gifted Child Monthly, 9(1), pp.1—3.



江住 よしえ

ラマダーンの季節が近づいてくるととても特別な気分になります。普段よりも自分がムスリマであることをより実感し、そんな自分が存在することに感謝します。そしてラマダーンが近づくに従って心の準備をするようになります。ラマダーンは断食の月ともいわれるように体調を崩さないように断食ができるかどうかという緊張感と、特別な月に自分がどんな気持ちで過ごす事ができるのかという緊張感も同時に生まれます。普段寝過ごしてしまいがちな朝の礼拝もこの月こそは朝の礼拝を決して逃すまいという緊張感も生まれます。

本来なら常にこんな緊張感と共に過ごせたら理想的なのですが、私にはまだその強さがなく、自分に甘くなかなか自分の理想とする姿に自分を近づけることができません。

最近読んだ何かの本に、「人間は何か自分のできないことに対しては天才的な能力をもって言い訳を考え出す」とありました。確かに自分自身のことを考えてみても何か達成できないことがあると、それに対する言い訳はどんどんできます。そして私の場合は言い訳を考え出す他、不満もどんどん出てきます。疲れている、眠い、時間に追われている、という理由で朝の礼拝に立てないことが多いのも一つです。それからつつい他の人に目があって自分の立場と比べて自分の置かれている状況に不満をもつということもあります。見方を変えればとても幸せな立場にいるのに、そのことが見えず、さらに満たされることを望みます。人間の欲には制限がないとはこのことだろうと思います。もっと満足したいという欲をもちながらも、同時にそんな欲には負けずに常に感謝する人になりたいと思っています。

そんな時、友達からメールが届きました。そのメールにはたくさんの写真が載っていて片方の写真には豊かな暮らしをしている健康そうな子供達の様子や肥満気味の子供が写され、もう片方の写真には瘦せたアフリカの貧しい子供達や生活の様子が写されていました。それらの写真を見ていると私達がどんなに満たされているか、また満たされる以上のものを持っていること、十分である以上の状況に恵まれているということを感じました。とても心が痛むメールでした。

日本でのこんな豊かな暮らしができてどうして不満が言えるのでしょうか。どうして些細なことにこだわってしまうのでしょうか。どうして平気で食べ物を残してしまうのでしょうか。どうして次々と本当に必要のないものを買ってしまうのでしょうか。夏には暑いと、冬には寒いと不満を漏らし、梅雨には雨が多いとまた文句がでてしまいます。身体は健康で、満身に食事ができて、暖かいシャワーがいつでも浴びられてふかふかのふとんで寝ることができます。冷たい水がいつでもどこでも手に入れることができ、寒い日には暖房をつけ、暑い日には冷房をつけられます。“もの”や、些細なことから遠ざかり、自分に本当に必要なものから常に目を離さないでいたい。そして心から不満のない状態を保てるような、そして常に感謝の気持ちを忘れない自分を目指したいです。

## 『大きな鳥と小さな鳥』 Uccellacci e Uccellini

ラマダーン月が目前(これが出るころにはもう入ったでしょうか?)の今日この頃。皆様いかがお過ごしでしょうか。ラマダーンはあれこれと考えごとも多くなりますし、対外的にも有名な月ですので周囲の人からあれこれ聞かれる事も増えると思います。どうやったら相手にうまくわかってもらえるのか、なんて説明したらいいのか…。人に何事かを理解させるのは難しい事です。更に表面では理解できても、納得というか、「腑に落ちる」状態になるまで理解をすすませるのは至難の業です。本当にわかりあうのは無理なんじゃないかと思うほどです。ですが、とにかく話を聞いてもらい、表面からだけでも理解してもらわないと何も先にはすすみません。そのためには何が必要なのでしょう。それは「言葉」ではないでしょうか。態度もちろんそうなのですが、相手に何ごとかを理解させるためには、まずは相手と同じ言葉を使わないとダメである、といえないでしょうか。ここでの「同じ言葉」とは、同じ言語という意味だけでなく、同じ目線に立った考え方、そこから発する言葉であるともいえます。高みから発せられた言葉が人に響く場合もありますが、それよりは同じ平面からの言葉のほうが理解しやすく、対話が出来る。私はそう思います。

「まずは同じ言葉を使わないとダメ(それでもダメかも)」という事を納得した映画が、今回ご紹介する『大きな鳥と小さな鳥』の一部です。

---

いつ、どこで、どう終わるとも知れない旅がある男と息子が続けている。道すがら、様々な珍妙で不合理な人やモノと出合っていくが、ふとしたことから人の言葉をはなすカラスが道連れになる。このカラスは旅の途中ずっと哲学的な質問(お前たちはどこに行こうとしてるのか、なにをしてるのか、どうやって生きているのか、人生についてナンと考えているのか)を親子にぶつけるが、彼らはそんなことは知らないので答えない。

そこでカラスは、彼らを啓発しようと試みるが、男とその息子は多大な無関心をもってカラスに應對し、話は聞くものの全くカラスの意図に乗ってこない。しゃべり続け、物事を観察し続け、分類し、識別し続けるカラスとそれを聞かされる二人の運命はいかに。

---

この映画は、小難しい雰囲気を持っています。そして話があるようなないようなロード・ムービーなので、多くの人には面白くもなんともない映画かもしれません。この映画の監督、パソリーニはクセが強く、彼の映画は大体が「難解な作品」「哲学的・神学的に深い」と言われて評価が定まりづらいところです。この作品も現代社会への警鐘劇であり、ブルジョワ批判の強い作品ですが、深追いしなければ強烈なブラック・コメディとして楽しめる作品です。

さて、ただらと続く旅の途中、カラスはある故事を例えに自分の独断を説明しようと試みます。彼がそこで持ち出すのは、鳥に説教したことで有名な聖フランチェスコ。大きな鳥(タカ)と小さな鳥(スズメ)の物語です。聖フラ

ンチェスコが修道士二人に向かって、「鳥の言葉を我がものとし、鳥たちが互いに愛し合うよう説教しなさい」と命じます。修道士の必死の努力により、ある日タカの言葉を理解する事に成功。次に、スズメたちの言葉を学び始めますがタカの時と同じように話しかけても効果が無いのです。修道士たちは悩んだ末、スズメの言葉はタカのものとは違うと気づきます。そこで再び努力の結果、ついには双方の言葉を解する事が出来、目標である「タカとスズメが互いに愛し合うように説教をする」事が出来るようになります。しかし、喜びもつかの間、タカはスズメを襲ってしまいます。修道士は絶望しますが、聖フランチェスコともう一人の修道士の助けにより、再び説教の旅に赴きます。

カラスの言いたかった事は何だったかちよっと忘れてしまいましたが、このシーンは作中最も面白く、最も印象深いものでした。

タカとスズメの言葉は違う。違うから、違う方法で話しかけないと理解できない。ここには両方の言葉を解する事のできた仲介者となる修道士がいましたが、その仲介者をもってしても、片方ずつにしか話は出来ませんでした。タカとスズメお互いが理解しあうのは到底無理そうです。

ですが、タカにはタカの言葉で、スズメにはスズメの言葉で話さないといけない、という事がわかっただけでも良かったのかもしれない、とも思います。それに、修道士とスズメ、修道士とタカでは話を通じ、考えを伝える事ができましたから、そこから一歩進んだところでタカとスズメが互いにどう話をつけるか、修道士からの言葉をどう理解し互いの関係に当てはめていくのか、というのはまた別の次元の話なのかもしれません。

何事かを理解するというのは大変困難でな事なのですが、お互い語り合いもせずに決まった関係を受け入れて続けるよりは、自分がタカの立場であってもスズメの立場であっても、修道士の立場であっても、無駄かもしれないけど話す努力をしてみてもいいのかもしれません。それによって「理解」出来るかはわかりませんが、たとえ心底理解できなくても何かの助けにはなるのではないのでしょうか。

今回は、このような、わけがわかりにくく人にうまく伝えにくい事をしみじみと考えた、わけのわからない映画のご紹介となってしまいました。皆さんも是非、「理解とは何か」という問いに対して自分なりに考えてみてはいかがでしょうか。

『大きな鳥と小さな鳥』1966年 イタリア 86分

監督:ピエル・パオロ・パソリーニ

音楽:エンニオ・モリコーネ

出演:トト(父)/ニネット・ダヴォリ(息子) 他





## 不安と趣向

考えてみれば生まれて16年。

0歳、1歳、2歳、3歳・・・、記憶は断片的ですが、物心つかないころも今と同じように時間が過ぎていたんですね。おもしろいなあ。僕は昔から、何かに集中的に熱を上げる人間でした。完璧症というのでしょうか。そのころは今みたいに、完璧症で不安になる、なんてことはありませんでしたし、なにしろ猛烈で、好きなことにブワッと突進するわけです。

幼児期、まずパワーショベルに夢中になりました。もうすごかったです。音がただけでもすごく気になって。見たいんです、パワーショベルが。本も5冊は買ったし、おもちゃも数十個買いました。

そして「ウルトラマン溺愛期」「世界の紙幣溺愛期」「第一次さだまさし溺愛期」などの後、空前の恐竜ブームがやって参りました。もう頭の中恐竜だけ。当時発表された恐竜の名前、今でもほとんど覚えてます。ただそのころから「恐竜の名前、忘れちゃったらどうしよう」なんて不安は、ありました。

で、12歳の夏、三国志に出会いました。これがまた、人がたくさんでてる。全部覚えないとなんか不安で、一日中「曹操、夏侯惇、李典・・・」なんて言っていた日もありました。

中学に入って「PCゲーム溺愛期」に入りました。二年半続いたんですが、苦しかった。世界が広くなっちゃって、「PCのメーカーを覚えないと」とか、「PCゲームの全てを知っておかないと」とかいう風にどんどん追い詰められていって、結局スッパリやめました。

13の冬でしたか、「好きなものリスト」を作ったんです。これが仇になりました。リストに入らない好きなものを見つけると、不安でたまらなくなる。あんなものつくるもんじゃないなあ・・・。

さらに14の秋のある日、友達と遅くまで野球をして、楽しかった。それから、「楽しい」に不安を感じ始めました。「忘れるのが怖い」からでしょうか。

去年あたりから自分でこの不安を研究するようになりました。

今やこの不安は、恐竜や三国志やさだまさしを押しつけて、私を占領しています。





## 祈り

ラマダーン中にもっと祈りをすると思われる皆さんへ、いろいろな祈りを紹介します。

わがアッラー、

あなたのお恵みによって朝を迎えました  
あなたのお恵みによって夜を迎えました  
私たちはあなたのお恵みによって生き  
あなたのお恵みによって死を迎えます  
戻るところはあなたなのです

私はただ、あなたの慈悲だけを頼っています

私の罪をみな、お許してください

なぜなら私の罪を、ただあなただけが許しになれるのです

私の悔悟をお認めください

あなたは悔悟を認められるお方、

慈しみ深き方であられます

わがアッラー

私を、

あなたを常に唱念し、あなたに大いに感謝し、

あなたを畏れ、あなたに従順であり、

あなたに対する謙虚さ、畏怖と敬意で満たされ、泣きながら祈りを捧げ、

いつでもあなたに向かっている人としてください

わがアッラー、

我々のうち生きている者、死んでいる者、

男性、女性、

年少の者、年長の者、

ここにいる者、いない者に

罪の許しをお与えください



8月号の「やすらぎ」で特に印象に残った一文がある。

「そもそも、信仰する人にとって、人の生きる時間はラマダーン月のようであり、成年期は断食開始の時間、死は断食明けの食事の時間である。一ヶ月のラマダーンは、生涯続くしもべとしての齋戒への練習のようである。30日間で獲得したすばらしい性質を一生維持することができる人は、ここで少々空腹やのどの渇きを味わう代わりに、あの世において『わがしもべたちよ。あなた方はしばしば、顔色が悪かったり、目が落ち窪んでいたりしていた。私の為にこれらに耐えていた。過ぎ去ったあの日々のかわりに、今こそ食べなさい。飲みなさい。』という呼びかけを聞くだろう。そしてその日、真の「断食明けの食事」をとるだろう。」

これを読んで大いに反省したことは、今までの自分にとってラマダーン月とは特別な存在であり、ラマダーン月のあの満ち足りた夜の気分、静かに月の形を仰いだり、「今この瞬間にも世界各地で断食が続けられている。」とムスリムとしての一体感を感じたりするのはあくまでもラマダーン月に特有のものである、というような見方をしてきたこと。ラマダーン月の最後の日になると「ああこれで今年のラマダーンも終わった。」と既に過去の存在となり、ラマダーンが再び近づいてくるとようやく「ああ今年もラマダーン月が来る。」と思出す、といった繰り返しだった。ラマダーン月に含まれる英知によって、ラマダーン中は普段よりも創造主の恵みを実感し、感謝し、熟考し、自我の鍛錬を行なうことができる。自分の無力さを認識し、アッラーに庇護を求める、ということがどういふことなのか改めて理解することができる。クルアーンをがんばって読んでみたり、長い時間をかけて礼拝を行なったりする。

しかしラマダーンが過去のものとなると同時に、これらのことも過去のこととなり、普段の自分に戻ってしまう。そして「ああなんだかラマダーンが終わって寂しくなったな。」と感慨に耽ったりする。

ラマダーンが終わるたびに毎年感じるこの寂しさのようなもの、そしてラマダーンが近づいてくるたびに毎年感じるこの喜びと厳かな気分こそ、私の自我に警告を与え続けてきた私の魂の本體の部分の声だったのだろうと思う。

「人の生きる時間はラマダーンのようである。」

ラマダーンの英知を考えながら読むと、この一文は更なる深みを帯びる。人の一生は鍛錬であり、のどの渇きや空腹など、忍耐を要するものでもあり、一方で創造主の恵みを実感し、感謝し、熟考できる場でもある。ウンマとしての一体感を感じさせる多くの機会もある。そしてこれらをより深めることのできる最大の機会こそが、ラマダーン月なのだ。「30日間で獲得したすばらしい性質を一生維持する」努力すらしていなかった私には、ラマダーン月の恵みと英知を真に理解することはできていなかった。一ヶ月のラマダーン月は、人生という大きな「ラマダーン月」における練習、鍛錬、そしてよりよくそれを生きるための補助であり、その存在自体が恵みであり、英知であり、そこにはまた無数の恵みと英知が含まれる。だから、ラマダーン月が終わるや否や来年のラマダーン月を楽しみに待っているような生き方を改め、この一ヶ月で獲得したものを継続させる、という努力が必要だと心から思った。



断食は、人間の社会生活に関しても多くの英知を秘めており、そのうちの一つが次のものである。

人は、この世での生活においてさまざまな状態に創られた。真の主は、そういった違いによって、裕福な者が貧しい者に手を差し伸べるよう招かれておられるのだ。裕福な者は貧しい者の辛い状況やひもじさなどを、この断食において空腹を感じることによって、確かに感じることができる。もし断食といったものがないければ、自己に執着する金持ちばかりになり、ひもじさや貧しさがどれほど辛いものか、彼らがいかに憐れみを必要としているか、ということを把握することはできないだろう。こういった、人の同類である人に対する憐れみは、真の感謝の基本でもある。誰であれ、自らよりもさらに貧しい状況にある人を見出すことはできる。その人に対する憐れみは彼の義務である。もし、自らの自我にこういったひもじさを味あわせることがなければ、憐れみによって助け合いの義務のために援助をすることができなくなる。それを行ったとしても、あるべき形ではできない。なぜならその真の状況を、彼の自我は感じてないからである。

\*\*\*\*\*

ラマダーンにおける断食は、自我の鍛錬という点でも多くの英知を秘めており、その一つは次のとおりである。

自我、自己の欲望というものは、自由で思い通りであることを望み、またそのように認識している。自分が全ての物を与え、導くことのできる存在であるかのように妄想し、思い通り気ままに振るまうことを望む。それはその特質でもある。無限の恵みによって導かれてきたことを考えたがらない。特に、この世において富や権力を持っていて、その上に不注意さまで加わるのであれば、強引に、強盗のように神の恵みを奪いつくすようになる。

しかし、ラマダーン月においては、最も裕福な者から最も貧しい者まで、全ての人々の自我は、次のことを知ることになる。すなわち、自分は王ではなく、その民である。自由気ままなものではなく、しもべである。命令されない限り、どんなにささやかで容易なことでも行えない。その手を水に伸ばすことはできない。自分が全能であるかのような妄想は打ち砕かれ、しもべとしてあるようになる。真の義務である、感謝を行なうようになるのだ。



購読価格（郵送料込み）バックナンバーは、1部 200円（日本以外は1部 250円）

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号: 00100-6-354012 口座名義: 月刊誌やすらぎ

三菱東京UFJ銀行 店番号: 630 (春日部) 口座番号: 1134374 口座名義: 月刊誌やすらぎ  
皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com> [info@yasuragiweb.com](mailto:info@yasuragiweb.com) [yasuragi\\_nihon@hotmail.com](mailto:yasuragi_nihon@hotmail.com)

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部